

# 毒婦の渴き

渚 まこと

>

午前二時過ぎ、賀屋義紀はスマホの澄んだコール音で目覚めた。

隷愛する早月杏里からだ。

「シャワーを使ってから、私のベッドに来て……」

真夜中なのに、艶やかな声音が妖しい。

義紀が『師匠』と呼ぶ毒婦・早月杏里に何を望まれているのか、よく分かっている。義紀が早月杏里に対して使う『毒婦』というインパクトと存在感のある言葉に定義はないが、魅了の容姿、秘めた淫逸なセクシュアリティ、長けた奸智を有することがその絶対的要件になる。この言葉で呼ぶ女性は師匠・早月杏里と、師匠のパトロンである富豪未亡人・江嶋艶伽の二人に限られ、麗しき、という冠詞がつく。他の奸婦を毒婦と呼ぶことはない。

義紀は隷愛する麗しき毒婦に飼われる身だから、飼い主の意に隷従するのは当たり前だ。常に麗しき毒婦・早月杏里の忠僕を認じ、濡場では性奴役を本音で悦受している。絶対忠僕的首輪をはめられてから九年余が経過したが、飼主への絶対忠従の習性は例え真夜中でも変わらない。

『師匠はマルチ秘書・飛高真希と同衾してるのに……』

少し怪訝に思ったが、濡場では凄艶な性魔の別貌を剥き出す師匠の意には逆らえない。直ぐ隣設のバス・ルームでシャワーを使い、師匠への忠隷心を冴えさせた。

>

キング・サイズのオリジナル・ベッド上の女と女の耽美な情交……隷愛する師匠と、義紀ともリンクしている真希の迫真のからみに見入った。アダルト・ビデオのレズ・シーンがママゴトに思える隈眺は半端ではない。直ぐ触発されて劣情を滾らせ、師匠にタフなペ\*スと折紙をつけられた摩羅を猛らせた。

イメージするウェヌスに等しい師匠と、琥珀色の雌豹を想わせる真希のボディ・プロフィールは熟知している。

幾つもの貌を持つ師匠……麗しき毒婦・早月杏里のスレンダーな女身は絶品だ。艶と張りが素晴らしい絹肌は真珠色。濡れ羽色のミディアム・ヘア。愁麗な彫りの小貌。身長一六九。B八四・W六〇・H八六。

琥珀色の艶肌に張りがある二十五歳の飛高真希の妖熟した女身は邦人離れしている。才女らしい知的な彫りの小貌。艶やかなコーヒー・ブラウンのショート・ヘア。身長一七〇。B八三・W五九・H八五。

隷愛する師匠の淫逸なセクシュアリティ、凄みの名器を知り抜き、師匠と絶てない性鎖で繋がる真希の突出のセクシュアリティ、摩羅喰いの名器を熟知している。

照度を絞られた暖色系の間接照明、フロア・スタンドの灯りで寝室の妖しい雰囲気により深められている。師匠と真希がからむレアな猥眺は生半可ではない。卑辱な大股裂きポーズ悦受する真希の股間に貌を被せた伏臥位の師匠が、両手指と唇と舌を使って淫蕩な性情を剥き出した真希を淫絶に弄び廻る耽美な情景に魅入られた。

義紀に気づいた師匠に、

「義紀、早く、バックから挿れて……」

とぬめったトーンで命じられ、エロジナスに張ったヒップを突き上げられ、性蜜まみれの秘部を見せつけられた。

『性奴冥利につきる……』

内心で舌舐めずりし、その果報に錯悦した。

隷愛する師匠との濡場で性奴と化す習性は常に変わらない。性奴の矜持を疼かせて師匠の背後で膝立位になると、生唾が出るエロジナスなヒップを両手で掴んだ。タフと師匠に褒められるシンボルは淫痛を覚えるほど充血し、淫劣なテンションが異常に高ぶった。

『麗しき式毒婦、隷愛する師匠をバックから姦る悦楽は格別だ』

心底で本音を呟き、はち切れそうに充血したグランスの先端を性蜜でぬめったスリットに当てた。

「何を躊躇ってるの。義紀が欲しくてたまらないプ\*シーでしょ」

ヒップを後ろに突き出され、グランスをヌルツと銜え込まれた。

「根元まで呑み込んで上げるから、真希の痴態を観ながらマニアックに抜き差しして……」

師匠の原色の睦言に嬉々と応じた。

「オウン、たまらない……」

義紀も、

「ウツウツ……」

と、喜呻した。

途端に発達した膣周囲筋をきつく締められ、

「オウツ……」

と、淫らな呻きを重ねた。

「気持ちいい？」

「脳裏が糖蜜が染み込むみたい……」

「スレーブらしい言葉をつかいなさい。飼い主の私を怒らせるの」

スレーブと呼ばれて芯髄がカット熱くなり、師匠への隷愛心がより覚醒し、師匠に植え込まれた女尊男卑のイズムが疼いた。

「許して下さい」

心底から許しを請うた。

「サドっぽいやり方で、私をアクメに舞わせてっ。でも、ヒップに爪痕を残さないでね」

好きな褒美を与えられた子供のように悦び、エロジナスなヒップを優しく掴んだ。

>

世間から富裕とみなされる早月家のガードは堅い。

真夜中の猥雑な性宴も、当然、プライベートの分厚いベールで包まれている。三者にその情報が洩れる危惧はほぼ皆無。性道義上はデカダンと見られる性生活、その様態は隠蔽されている。『濡場で凄艶な性魔に妖変する師匠がからむ三つ巴の性宴は別格だ。スレーブ冥利に尽きる……』

濡場で性奴になる身を微塵も恥じない。

「義紀、全裸になって、仰向けになりなさい」

妖気を漂わす師匠に命じられて腰に巻いたバス・タオルを外し、ベッド上で仰臥した。

「縛って、可愛がって上げる」

師匠の言葉が嬉しい。辱縛プレイに馴れた師匠と真希の手で、四肢裂きに辱縛された。

「真希。義紀の股間に跨がって、反り上がったペ\*スを呑み込んで……」

淫魔の別貌を剥き出した真希の性欲は底知れない。直ぐ股間に跨がられて腰を沈められ、異常勃起したシンボルを根元までヌルヌルツと喰らい込まれた。タイトで奥深い極旨の蜜壺だ。無数の触手と吸盤に捉まえられた感じがたまらない。

「オウーン、猛り狂ってる。凄いボリューム……」

平常、クールな個性美で魅せる才女……濡場で淫魔の別貌を剥き出す真希は紛れもない隠れニンフォマニアだ。早月家の表裏を知るマルチ・バトラー・真中露美、彼女の分身の真中聖子……十五歳の美魔少女と同じように麗しき毒婦・早月杏里に絶えない性鎖で繋がれている。無論、早月の血族、縁故者ではない。早月家に共棲する家人の一人だ。

「ウフフッ、真希、義紀のペ\*スはどう？」

師匠が真希に問うた。

「猛々しくて、脳裏が痺れるほど美味しい……」

「速効性のクスリが効いてるようね」

「エッ、あのクスリを？」

真希が問い返した。

「義紀の悪魔的なポテンツにも限界があるわ。一昨夜、露美に欲しいだけザーメンを搾り取られたはずよ。ハードなセックス・スレーブ役をこなすために、自分であのクスリを服む分別はあるわよ」

義紀は師匠に事実を抉られ、真希の蜜壺に呑み込まれたシンボルをドクドクと脈打たせた。

「義紀。幾度、淫獣の露美にザーメンを吸い取られたの？」

真希に問われ、腰を小刻みに揺すられた。名器といえる真希の蜜壺は性折檻具のように凄味だ。性蜜が淫潤でも強烈に締め付けられる折檻がたまらない。その上、被虐性悦を隠せない貌を師匠に見入られている。

急激に高まる性感を抑え、

「四度……。サド雌っぽく燃える露美の意のままに姦られた……」

と、正味を答えた。

「想像通りだわ。真希っ。思い切りペ\*スをいたぶってっ。クスリが効いてる二時間余りは絶対に萎えないから、ザーメンが枯れても絶頂責めで悶絶させて……」

「ウッフッフ、たつぷりと愉しんでやるっ」

真希の双眸に妖光が宿った。

「フッフッフ、貌に跨がって上げる……」

淫辱な予知通り、両膝を折った師匠に逆位で貌に跨がられ、性蜜でぬるついた秘部を口にあてがわれた。

『極上のご褒美だ』

内心で眩き、錯愕した。麗しき毒婦の性蜜は即効性のハード・ドラッグに等しい。レアな秘肉感がたまらない。わずかに残っていた理性が瞬時で飛散し、師匠への狂おしい隷愛炎に灼け、口をスリットに吸着させて淫靡な音を立てながら貪った。

「本当に愛しいスレーブ。真希と二人でたつぷりと翳って上げるわ」

師匠の魔淫な睦言が愛囁に聞こえた。

「ヒロインの極太のスティックを挿れてるみたい。無数のペ\*スを挿れてきたガーリーでも、一度、義紀の猛り狂うペ\*スを挿れたら、間違いなく虜にされるわ」

真希の睦言も嬉しい。

ほぼ一時間余、辱縛されたまま、異常発情した師匠と真希に辱虐姦される秘悦に呆けた。

>

午前六時過ぎに目覚めた。

内縁妻・真中露美が五時頃にベッドから出たことを知っていた。睡眠時間は実質二時間半余りなのに、痴狂なセックスの疲れは嘘のように拭われていた。

全裸のまま専有のバス・ルームに移ってシャワーで全身を洗い流し、露美に用意されたラフなコスチュームに着替えた。ダイニング・ルームで朝食をとり、聖香がいるリビング・ルームに移った。

ソファに腰掛けた聖香がテレビを観ていた。

名門・カトリック系女子高校の制服が憎いほど似合っている。早月家の表裏を知るオールマイティーの家人……バトラー、マルチ・メイド役までこなす露美は朝食の後片付けを済ませ、師匠の書斎の掃除に取りかかったようだ。

義紀は聖香が腰掛けたソファに並んで腰掛け、テレビを観ながら記憶回路から一昨夜の美魔少女・聖香とのからみ呼び覚ました。

イメージするフェアリーに近い容姿が冴える聖香は、母・露美の淫血を継ぐ珠玉の美魔少女だ。早熟のスレンダーなボディーは成人女性と変わらない。内縁妻・真中露美の分身だから、義紀

とは事実上の義父娘の間柄になり、実父を知らない非嫡出子の聖香にも義父と認められ、パパと呼ばれている。

「ママはオーママの書斎を掃除してるわ」

聖香を娘のように可愛がる早月家当主・早月杏里をオーママ、家元、師匠と呼び分ける聖香に熱っぽい眼差しを向けられた。

「知っている。露美の掃除を手伝う」

ソファから腰を浮かせかけると、

「手伝わずに、愛しい娘を抱いて……」

と、淫らっぽく迫られた。

聖香の通学には一時間余りを要する。七時半迄に早月邸を出ないと遅刻する。

「もう七時十分前だよ。淫らなことをしていたら遅刻してしまう」

優しく駄目を出した。

「八時二十五分までに校門を入ればセーフよ。パパが車で送ってくれたら三十五分で着くわ。アネが近づくと、無性にセックスしたくなるの。そうしないと体調が狂うし、脳裏の冴えが鈍るわ」

「登校前にセックスするなんて、本当にいけない義娘だ」

優しくいさめたが本音は異なる。挑発されたかのように欲情し、穢れのないフェアリーのような容姿からは想像もつかない両性を喰らう美魔少女の中に猛ったシンボルを挿れたい衝動を抑えられない。聖香の白蠟色の女身はセックスの美味しさを知る成人女性並みに熟れている。秘めた性欲は空恐ろしい。セクシュアリティ、天与の名器といえる女性器、淫らなスタミナにおののきすら覚える。

既存の性道義を嘲る師匠、セックスをエネルギーにする師匠の付人役もこなすマルチ秘書の真希、実質的義父の義紀とリンクした美魔少女だが、鬼畜に堕ちる母子相姦はタブーにしている。

世間に見せる富裕族の早月家のたたずまいに異常性はないが、秘された実態は伏魔殿に等しい。隠蔽された私生活、性生活は社会通念を大きく逸脱しているが、珍しくないデカダンなオーギー・パーティでも、真中母娘がからむことはあり得ない。

『聖香は悪魔の申し子かもしれない。どんな毒婦、妖婦に進化？するのだろうか？行く末が案じられる……』

愛しい聖香の未来像に怖れを抱く。

「時間が惜しいから、このソファの上で抱いて……」

欲情を隠さない聖香はもどかしげにスカートを脱ぎ、アイボリーのアンダー・クロスと、制服に合わせた黒のストッキングを剥き取り、眩しいほどエロジナスな下半身を晒し出した。

『登校前の聖香と交尾むなんて……』

瞬時、義紀は罪悪感にたじろいだ。

「オーママは、午前九時に福井で絵の取引があるから、五時半頃、真希さんがハンドルを握るセダンで出掛けた、とママから聞いたわ。怖い師匠に見られる怖れはないから、早く私を抱いて……」

淫らに促され、

「ママには見られても構わない。早く、いけない義娘と交尾んで……」

と、あけすけに迫られた。馴れた手つきでストラックスとブリーフを膝までずらされ、間を狭めた両太腿に跨がられた。

「怖いほどエレクトしてる。私、知ってるのよ。昨夜、パパはママと幾度も交尾んだ後、オーママと真希さんに無慈悲に姦られたことを……」

セックス馴れしたガーリーのように両腕を頸に巻きつけられ、シンボルの根元とまでヌルヌルツと呑み込まれた。

「ウーン、美味しい。パパのタフなペ\*スは最高っ。私、告白する。私の初めての男はオーママにスレーブの首輪をはめられた男……ママの内縁

夫のパパよ。二番目の男はオーママとリンクした生臭坊主。三番目の男はオーママから絵画を買う富豪の好色老人。四番目の男は華道・華杏の会の有力支援者の男。オーママに示唆された時だけ、三人の男と密会して交尾んでいるわ。パパ、妬ける？」

「三人の男を愛してる？」

「パパのバカッ。愛なんて欠片もないわ。オーママの仕事のお手伝いだと割り切ってる。でもセックスは愉しめるし、アクメはつきものよ」

義紀は奇怪な嫉妬を覚えたが隠した。当然、呑み込まれたシンボルの脈打は止められない。

「パパのシンボルは正直ね。嫉妬してドクンドクンと脈打ってる。春画収集家の超好色老人に抱かれるのは、オーママが春画の取引をした時だけ。私とのセックスが取引の条件に入ってるみたい。華道・華杏の会の有力支援者の壮年エロ男に抱かれるのは、月に二・三度。絶倫の生臭坊主と交尾むのは、月に二度か三度。時折、欲情したオーママもからむ3Pプレイもあるわ。でも、愛する男はパパだけよ」

義紀は奇怪な嫉妬を抑え、両手で瑞々しく張った聖香の桃尻を掴んで腰を細かく震わせた。

眉間に特有の縦皺を寄せてヨガル聖香は理屈抜きで愛しい。

『隷愛する師匠は、ビジネスに聖香の珠玉の性をからめている。師匠の奸辣なやり方が恨めしいが、麗しき毒婦・早月杏里に飼われる男だから何もいえない……』

師匠がビジネスに聖香の珠玉の性を利用している構図が透けて見え、悔しげに下唇を噛んだ。

「同性とは？」

「最愛の女は師匠、家元と呼ばれているオーママよ。オーママのマルチ秘書の真希さんも好き。そして、富豪未亡人の江嶋艶伽……」

「知ってる。他には？」

「担任の女性教諭……」

「エッ、担任の……？」

驚きを隠せず、問い返した。

「そう、クリスチャンの根岸真実。二十九歳のシスター・キャラの才女とは裏腹な隠れ淫乱よ」

「教義、校則が厳しいカトリック系の名門・女子学園にそんな不逞な反面教諭が……」

「女というイキモノは化け物よ。八ヶ月余り前、彼女の家庭訪問を受けた時、オーママとママが

対応したわ。何が起きたか、その魔絶のエピソードを想像できる？」

「あり得ない想像だが、理不尽に犯した？」

「その通り。パパも知ってるようにママは女だてらに格闘技を身につけた隠れ猛者よ。関節技が得意。根岸真実の抵抗は無力同然。応接間のソファが修羅場になった。数分後には居直って淫乱女の別貌を剥き出した女教諭は、淫辣な夜叉に化けたオーママと性獣の本性を剥き出したママに延々と辱姦される秘悦に呆けた……」

「強姦は犯罪……」

「強姦にはならないわ」

「和姦……」

「そうよ。平常、クールなたたずまいで魅せる女教諭は居直ったわ。隠れ淫乱の本性を顕わにして応じたのよ。無論、ママは根岸真実と特定できる猥雑な写真、迫真のビデオを撮った。怪しい気配を感じて応接間に入った私も、密かに思慕してきた根岸真実と契ったの。ママから渡された賢いアダルト・トイ……双頭のスグレモノで、居直って淫ら狂いする麗しき反面女教諭と延々と交わったわ。オーママの眼前でママが手にしたビデオ・カメラのレンズに舐められながら……」

「まるで性地獄絵巻だ」

義紀は眩き、その性修羅場を想像して鳥肌立った。

しかし、師匠と露美の悪辣な所業に奇妙な快感を覚えた。麗しき毒婦が淫牙にかけた義紀の未知の女性……師匠と露美に力づくで犯されて居直った根岸真実が背負う魔妖な性業にも惹かれ、名門女子学園を強請れるネタを握った師匠の奸辣な所業に共感した。

特有のフェミニンな芳香を放散する露美の気配を感じた。

「強請目的のリンクではないのよ」

背後から囁いた露美Tシャツを脱がされ、

「聖香を学校に送るのだから着替えるでしょ。手間をはぶいて上げたわ」

と 囁かれた。

「根岸真実とのリンクを証すビデオと写真は、万が一の時に使う保険なのよ。聖香の性道義を嘲るセックス・ライフが露見した際、聖香の身の安全のたまの有効な担保になるわ。醜聞、スキャンダルを好餌にする一部メディアの毒牙は鋭いわ。奴等の毒牙の餌食にされたら、内々ではおさまらない。愛しい聖香は間違いなく強制退学処分を受ける。でも保険があればそのペナルティを停学処分、最悪でも同学園系列のタグがつく女子校への転校で落ち着させられるわ。相応の寄付金と手にした担保がものをいう。変遷のテンポが速い世相だから、半年もすればどんな醜聞でも霧散して、早月家は何事もなかったかのように歴史を刻む……」

露美の魔妖な囁きが脳裏に染み入った。

だが、

『露美の言葉の裏には、麗しき毒婦の奸智が潜んでる。危険な匂いがする邪淫な遊び心もからまっている。怖ろしい……』



と、怪しい戦慄を覚えた。

「師匠の意図は他にもある？」

心裏に芽生えた疑問を言葉にした。

「勘がいい。根岸真実は同学園・重臣理事とインセストで繋がった養女という丸秘情報は間違っ  
てなかったわ。本人に白状させた……」

「師匠は強烈な強請のネタを掴んだ……」

「師匠のやり方を揶揄するのはタブーよ。聖香の身は絶対安全を保証する保険で護られること  
になる、と解釈して欲しい。聖香の登校前のセックスでしょ。早く聖香に美味しいアクメを上  
げて……」

耳たぶを優しく噛まれ、魔淫に囁かれた。

>

午前十一時。

義紀は、明日、華道・華杏の定例華会が催される江嶋家の別邸に着いた。

用件は定例華会会場のチェックだが、江嶋家当主・江嶋艶伽……華道・華杏の会代表・早月杏里の  
パトロンである富豪未亡人……義紀が麗しき毒婦と呼ぶ今一人のはんなり毒婦との情事が主目的  
。

勿論、江嶋艶伽と早月杏里は濃密にリンクしている。単なるパトロンと愛人という主従関係とは  
異なる因縁の愛絆で繋がっている。

江嶋未亡人の秘書が準備した会場のチェックを簡単に終え、別邸から徒歩で七・八分ほど離れた  
セレブ御用達のプチ・フレンチ・カフェ・レストランに誘われて二人でランチをとり、別邸に戻った  
。

密かに敬慕する富豪・江嶋未亡人……情交の間では性奴役を本音で演じて愉しむ義紀の性を欲し  
いだけ貪り喰らう麗しき毒婦と二人だけの道歩きは初めてだ。閑静な高級住宅街の短い距離でも  
、気持ちは純な少年のように舞い上がった。だが、心裏で、師匠に示唆された江嶋未亡人との情  
事を思い描いた。

『会場の下見は名目の要件よ。義紀が担う役柄は江嶋艶伽好みの性奴。濡場でタフなスレーブに  
化ける義紀のセクシュアルティに惚れ抜いてる艶伽は、並みの隠れニンフォマニアではないわ。  
内風呂、露天風呂付きの別邸の離れの和室で、淫蕩な本性を顕わにした富豪未亡人私の愛人と延  
々とからむのが義紀のお仕事よ。艶伽は私の金の生る木。性奴の矜持を冴えさせて、艶伽の性快  
楽の具になる果報を貪りなさい』

師匠への隷愛心が疼き、性奴の矜持が冴えた。

隷愛する師匠が代表である華道・華杏の会の門人二〇〇人の会費だけでは運営できない。師匠  
の愛人であり、パトロンである富豪未亡人・江嶋艶伽の強力な支援は、新興団体の華道・華杏の  
会運営の不可欠要件になる。

『華杏の会の実質の主宰者は、江嶋艶伽になる……』

その実態を承知している。

師匠に飼われる自分は師匠の忠僕、忠奴だ。隷愛する飼主・麗しき毒婦の意に背くことはあり得ない。師匠の示唆で月に三・四度、ノーブルなたたずまいで魅せる江嶋未亡人ノ性快樂の具になってきたが、本音をからめて性奴役をこなしてきた。濡場ではノーブルなたたずまいとは裏腹な淫蕩なバイセクシュアリストの貌を顕わにする麗しき毒婦は、濃密なセックスを美と若さをキープするための秘薬にしている。わずかでも手抜きすれば直ぐ感づかれる。瞬時の手抜きもできないが、情事後の面妖な達成感は格別だ。

麗しき毒婦・早月杏里のパトロンは麗しき毒婦・江嶋艶伽、という構図を噛み締めた。

既存の和趣内装様式にとらわれないつくりの離れの和室が、真昼の性宴の場と化した。

八畳余りの和室の天井面は、マット・ブラックの漆喰塗り仕上げ。照度コントロールされる主間接照明と二基の行灯の灯りは暖色系。開口部は二箇所。紫紅彩漆喰塗り仕上げの四方壁面には、一六葉の等身大のレアな構図の春画……古典・枕絵本四十八手の体位の内の一六様の扇情的からみをマテリアルにした濡絵が組み込まれ、三x八のクリア・ミラーが八枚が組み込まれている。床の間に当たる二畳ほどの桜無垢板張りのスペースには、等身大金箔貼りの阿修羅立像が安置されている。

「ウフフッ、悪趣味な部屋でしょ？」

欲情を隠さない江嶋未亡人に問われ、

「素晴らしい部屋です。悪趣味とは思いません。壁面の春画が凄い……」

と、金に糸目をつけない麗しき毒婦の流儀に怪しい感銘を受けた。

『密かに羡慕する江嶋未亡人が金に糸目をつけずにつくった閨房で、彼女とマニアックな情事を愉しめるなんて……』

果報を実感した。

白絹の閨房着を惜しげもなく脱いだ江嶋未亡人に、フェミニンな芳香を放つシェイプリーな裸身を見せつけられ、師匠のエロチカな裸身とは異質なエロスが宿る女身美に圧倒された。

「この一連の春画は、古典・枕絵本四十八手の体位から抜粋した一六葉の扇情的からみをマテリアルにしたものよ。杏里から買い取った江戸末期の作者不詳の原本は秘宝庫にあるわ。私の嗜好でつくらせたこの部屋から私の性愛観が読めるかしら？」

「およそは分かります。この春画の制作者は？」

「杏里に紹介された初老のアーティスト……春画、濡絵制作に憑かれた匠職人のような画家。制作期間は約六ヶ月。計算上、一つの濡絵のコストは二八〇万円になるけど、相応の価値があるわ」

麗しき毒婦の淡々とした台詞に、富裕族特有の傲慢な嫌みがない。

奇異な感銘を覚えた金箔貼りの阿修羅立像に視線を移した。

「修復したあの年代物の阿修羅立像も作者不詳よ。修復職人も杏里の紹介された職人。円形台座に純金の円盤を埋め込んで、欠落部分を修復させて金箔を貼り替えた値打ちものよ。本体の買取り額に、台座に埋め込んだ純金円盤と修復額を合わせると、五千七百万円になるわ」

富豪未亡人のさり気なく口にする金額に驚き、義紀なりにこの部屋に使われた金額を推算した。『春画群、阿修羅立像まで含めた積算額は一億二千万を下らないだろう。大理石と御影石を主材にした内湯殿、和趣露天風呂の工事費が六千万前後プラスされる。無論、一階層離れの躯体建造費、諸設備費、外構工事費は含まれていない。江嶋艶伽の桁の違う金銭感覚が窺える……』舌を巻いた。

師匠・早月杏里が富豪未亡人・江嶋艶伽を金脈にする構図が見えた。

『師匠にとって、江嶋艶伽は無尽蔵の金脈になる……』

富豪未亡人と師匠の力関係を考えると、富裕階層にも大きな格差があることが如実に分かる。『私も富裕人種に入るけど、富裕レベルは低いわ。現在の江嶋家と早月家を比べれば、一〇〇対一ね。私の野望は、その比率を五〇対五〇に近づけることよ』

師匠の壮大な野心を知っている。

怪しい緊張を覚え、

『師匠に示唆された江嶋艶伽との情事は、わずかな不手際も許されない』

と、性奴の矜持を冴えさせた。

>

エロスが匂い立つ江嶋未亡人と対の白絹の閨房着を、彼女の手で優しく脱がされた。

無論、内湯を使った後はノン・ブリーフ。勃起したシンボルが股間から反り上がった。

師匠と同じように義紀のことを名で呼ぶ麗しき毒婦に、

「昨夜、今日、ミートする義紀との濡場を想像して、夜半過ぎまで気持ちが高ぶって寝付かれなかったわ。住み込みのメイドに仕立てたビビッドな雌と真夜中、耽美なメイク・レズに耽ったけど、義紀のタフなペ\*スを挿れたくてたまらなかった……」

と、ハニーに囁かれた。

「自分も、今日、華道・華杏の会の幹部会員定例華会の会場を下見するように師匠から指示されて、内心で、艶伽様に会える嬉しさで小躍りしました」

偽りのない本心を言葉にした。

「義紀に会場の下見をさせるように頼んだのは私よ。情事を愉しむための名目だわ。華会の準備は私の秘書に手抜きなくやらせたから、チェックの必要はない。目的は義紀とのセックスよ。早く、美味しい男……杏里の忠僕とからみたい」

本音を囁かれた。

真昼間の性宴の場は八畳強の和室。

畳面には毛足の長い緋染めチンチラ絨毯が敷かれ、複数の濃紅色のクッションが無造作に置かれている。絨毯の下には低反発性クッションが敷かれ、閨房敷具のような感触が妖しい。絨毯の周囲に約二〇センチ幅で覗いた畳色が妙に艶めかしい。床の間になるスペースに安置された金箔貼りの阿修羅立像に違和感がない。

予期しないタイミングで凄艶な夜叉に化けた江嶋艶伽が立位のポーズをつくった。灼隷愛する

師匠と同じように三十歳過ぎで加齢を止めた麗しき毒婦のプロポーションな裸身に改めて見惚れ、目敏く艶熟のボディ・プロフィールを読んだ。

身長一六八前後。綺麗に張ったヒップは八六前後。悩ましく括れたウエストは六〇前後。エロジナスなアップ・フォルムのヒップは八六前後。真珠色の絹肌にロゼが射し、性興奮でノーブルな小貌が凄艶な夜叉貌に変わり、バック・シニヨンを解いた紫黒のロング・ヘアが夜叉貌をより妖しく際立たせている。

どんな場面でも艶絵になる麗しき毒婦の妖姿に魅入られた。

「義紀、私の裸身に魅了される？」